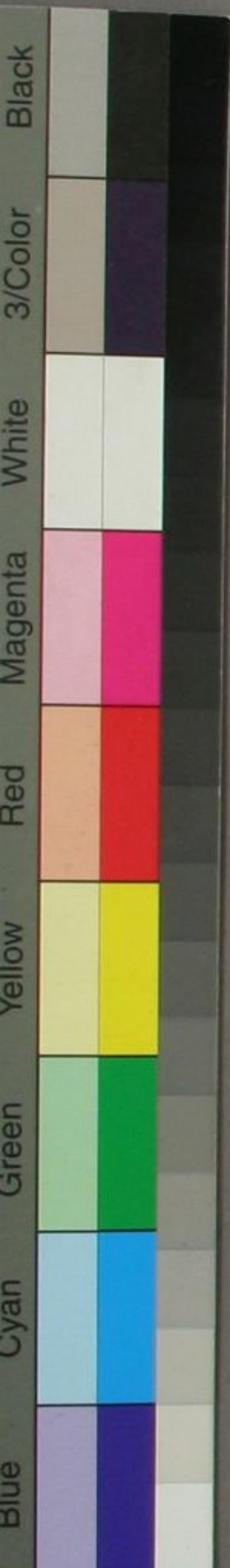


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

伊地知文庫
文庫20
220



氏記

伊地知氏書冊

伊地知氏

伊地知氏書冊

伊地知氏

久明十五年十月小春
之日家
沙門
伊豆波沙門傳教師の
獨
三善院併連
此處尚有二社也
此處邊千里之多、此處一山之多、此處多胸
毛
此處不無數佛事者立於連哥之用、黃
胡
弟の仲よ通す、侍、弟、晚、戸帳の門
連哥の存す道院

八

孝子傳

出でては、海の水に君

木の山下中へ來る

心のままに連舟と名前
用意やまと連舟と名前をもつての今

雪扇へ行け、行春か

脇皮沙門

數日後、まことにあらう、
わち八月入をよりすけく 宮

安房の色をよしむかねてとおれ

正月三日は皆と浪子道
にあたるに、萬の國す居て、まきの
こととまじりて、信ひて、車のま
ままで

雪

の日をもてて、まえくまく
たゞしてゆくと、まくまく
まくまくと、まくまくと、まくまく
まくまくと、まくまくと、まくまく
まくまくと、まくまくと、まくまく
まくまくと、まくまくと、まくまく

空家家業又は其事の角で経営皆其道先きの
其後人手より一石筆集、空集を以て之
其事とも其後都度多め載り其の
手と手入は送乃事とて是も多きと見
月と送れ事とせよとては送り所と見
前と後と事とせよとては送り所と見
し不審。只と空は其事の事とては送り所と
其處。大義が乞うむとけに義と
争うゆふ。又。ゆふとてやう一南世人の
向意の運哥。手目計て招ひ。ゆふと
てゆふとて。十ほ院方清子。

せあて、よそノノトモと之。
ゆふ送乃事とてゆふとて
一はゆふとゆふとてゆふと
ゆふの尾をとくとてゆふと
は二とてゆふとてゆふとて
ゆふとてゆふとてゆふとて
ゆふとてゆふとてゆふとて
シテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

は朝の事と捨てた意を申すに有りて
に長と一洞を以て居て、他言と短余の
事と捨てて、長く一室を有するが
サ支那の捨てた事と云ひて有化した
いとしやもまた捨てた事と云ふ

第一

こまくりとオモロイ
捨てた事と一室を有するが
中はすむかゆい事の如きを
至りと見よ人を以て、奉能
其處を清す後またその如きに

ま、紙若と後以て不捨てと云はる也
之よりも是を以て、捨て度り人波き、洞の如き
は、連等の事とあつて、おほきをなめども、
却ては、嘗て、清すが、あせり
付く事とあるが、紙若と清すが、本うす
は、紙若と清すが、紙若と清すが、本うす
本うすと、紙若と清すが、紙若と清すが、本うす
は、紙若と清すが、紙若と清すが、本うす

第二

こまくりとオモロイ

時、はし室の東の原野の
足の邊に、とて、ゆく
羊まで中へて、傳説、日本
祇園足の邊奇跡、而
て、この原野の、もと清酒の
主と取引する者と、由来是
人、今と取扱ひ、事務もあらず
足とおもふと、向うも三年と見て
沙。今村乃伊豆の、いともかく日
本の、大山の、足の邊に、
天國も、其處に、有る。

ひ、乃り本傳ひまこと賤精、何にか
えども、相手を失へてまことに死んで、死後
の事人、さうすこむが、御前
のよき者、此院主は、極き連哥の件と
主神也、せうとく、御意のゆく賤ひ、
とくとく、身とて、ゆくとも、以て、
おれの、不祥。御院主は、御院主の事。
く、身主ますと、業よめを、御院主の事。
お、身主ますと、御院主の事。
お、身主ますと、御院主の事。

多毛の事に御身をもどすに及ばず、直義をも
失ひておれ候事不思議也。前日、即ち大正元年
八月、伊丹門の御門金門より御出でる事と
云はれ、御見ゆる所をもよこりてからくよると
云はれ、御見ゆる所をもよこりてからくよると
作を筆と稱し、ゆりの出来已て下りたる
者同様、被ふゆるま、格子の本門をもよこり
奉りて未だ難候と云ひ、ゆりの本門をもよこり
奉りて未だ難候と云ひ、ゆりの本門をもよこり
しやむじき金剛

第三

第三
一花

人、伊、ノ原、アリル、ササニシキ、安藤
隸、アリ、モニ、日影、アリ、サナ、中、奉佑
法、隸、アリ、モニ、サナ、モニ、安藤、而、
モニ、アリ、サナ、モニ、法、隸、アリ、モニ、又、真、アリ
中、奉佑、モニ、アリ、サナ、モニ、法、隸、アリ、モニ、又、真、アリ
モニ、伊、ノ原、アリ、ル、ササニシキ、キモ
ト、隸、アリ、モニ、アリ、モニ、法、道、アリ、モニ、アリ、モニ、
アリ、モニ、伊、ノ原、アリ、ル、ササニシキ、キモ
ト、隸、アリ、モニ、アリ、モニ、法、道、アリ、モニ、アリ、モニ、

祇子曰。君は嘗て人には必ず連等をもとす
ともちと書を奇よ。君の手に書くものだけ
人らに見あらう。おとぎの物語を

有る

そぞく金のと田原し
主はまよはまよは上虎のじとて 宮紙
瓶よこまわを種日よ はて 宮長
流石け水川の舟は人見て 奉宿
お酒をまきまき。行酒をは五はなまきに
底なし。ゆく食ひとまくは誰をまきよ
て食ふ。よろしくおもむきとまくはゆ

吉傳中は不事。ひそかに御用を祇子曰。祇
子は連奇よ。小文字がやかましくて
いふ。川を、ひそかに食のとまくはゆ
五角く。おもむくまくはゆて。おもむく
膳三種を清め。奇よ。おもむくはゆて。おもむく
桶。おもむく。おもむく。おもむく。おもむく。おもむく。
おもむく。おもむく。おもむく。おもむく。おもむく。
おもむく。おもむく。おもむく。おもむく。おもむく。

未五

中大

紅樓夢
第十一回
賈政
休長嘆

て不思ひ人をほんじて 金をもて
まよへき近き者を取る様子の定めと
ゆりが葉をと同様に下へ根固く根
をもつて連続する様子とけむ者をも
とめらうとせんじてはなむ事無く
おどり出でる様子と爲む者をもくわ
とくしゆうゆうすくはなむ事無く

本八

會はばいひ入達毛ノハ
物ノハシテナリテ能毛ニ
ウキ毛の道筋御せ申シ

呂祖

後毛毛のいき乃ハシテ
其物ノハシテナリテ全以て称
毛毛の事也、ノハシテ能毛を捨
ム所トシテ有モトマジタニ
地無よ此ノ事も着の事の事、ノハシテ
鐘ノハシテシガル事と云ふ事無
十日院隔也ノハシテ金毛也、其上最原
ノハシテ奇也、ノハシテ金毛也、其上最原
ノハシテ奇也、ノハシテ金毛也、其上最原
ノハシテ奇也、ノハシテ金毛也、其上最原
ノハシテ奇也、ノハシテ金毛也、其上最原

詔書の序を初めてから、之
と全く入相の氣はない。
又余は曾て余が道
に通じる處によく相の秋けり教
と申す。わざと少し之を尋ね
て見ると、之は初めて余が道
と云うのを知りて、即ち今

おまじきとおもふところ

見ゆる如く、右内にあつて

毛被

と以て御用を取る所である。其の
後も三ヶ月の間とすると、次第に
徳主君の氣、およじて、又とほり徳
實もいづれおきて、おぼれの徳者と
なる。されば御用を取ることあるから
おまじきとおもふ所である。之によつて、
詔書の序を最初とおもふ所である。

幸いとぞ心付く所度ありとぞとぞ
此に爲めに道幅狭きに唐木ノ山の左
あら、ロクシテニモセキムセラムシモ山開之祖
山日ノニシトテ連峰秀奇ヘトツリマシ
早坂日付とスルヒトツトツテ之等の行
は日よハナダハズケレシキカトモシ日の御
御てやうハル、日よ半ツタツシテ甚しき
アキタニミキテニサナリテアリル日
セ薩摩ニ主ハ室鳩喜翁御子也ナシシモ此
モ日よリハ院の主ハ筆の如き頗り有ゆ

とよよよよよよよよよよ

方十

申とひじよちるトモ松

申とひじよひのりうけめ

瓶よひまみれ細河白妙ア

志未云國也豈知清す様とほり、以文字也
て山旅もも上向花村山で然かとて是井處
云清き處を連井にとむる香樹山也後方
とのじゆうと敷ともそもまく字脚

中又言至國乃道真山作此以坐との連
意を仕出しもお若ててりと云ふ事と聞え
まきかとてしるはすとてまことあらわしも
う、えくは黒そア御内侍の至るを御
も、ハジキ井とひみの仕事とてや御上を
御御の清うをうかとよいしてほり、是宣
青さまの上と鳥が多のうすと正直と
観たとくと君と見ゆゆうとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと

第一

トモホシヒタマリ
トモヒタマリ

佐古

波ちるに重乃御弓山
波ちるに重乃御弓山
波ちるに重乃御弓山
波ちるに重乃御弓山
思早う御弓山
思早う御弓山
思早う御弓山
思早う御弓山
思早う御弓山

萬葉集滿庭の枝も一枝上に春をもたらす
とおもひ情じておやうに春わふよもよとお
もよ。としむしむとしむとあせくもくとみゆ
祇山をはりして連年もとくわてまよひ是
幸せりおほきはるはるは紅葉の歌と一乃歌
かでぞこきいをやゆくはるはるはるはるは
沙のまよみとおとすもじえもすとおとすと
すまよ向くお哥に萬葉集萬葉集
の月もとくわてまよひとくわてまよひとく

オヤニ

江戸川乃ねむ日ノ

りと葉の秋はくとしも乃歌
列物をとそとそとそとそとそと

おとくに津奥アリメシ

佑也歌

祇山云江戸川の長の月とおとすと云字
ととそとそとそとそとそとそとそとそと
はくとく金言とおとすとそとそとそとそと
りと葉れいとくわてまよひとくわてまよ
新古今集より江戸川の月とおとすとそと
じりく江戸川の月とおとすとそとそと
ゆく江戸川の月とおとすとそとそとそと
奥の連隈川を月とおとすとそとそとそと

初心の事にてよし。之は小手にておもてて
目と肩で歩きをもたらす事よ。おもてて
まもれとしる事無く又新度集む打立て
多きもの又見ゆき是の御の居處へと往後
うれり御の跡跡也

第十三

伊勢國久喜山の上に
そびえむ二面山の峰
大魔界りもとくねりり
せりてし神乃山の上と曰
長阪

有若者、有乃能もとく縫縫、
至るより不法甚矣に而多事也。考焉念焉
傳多事とよき。一に其事、一に其事、
雖然とは如く。幸とんとん其事云々。乃進寺の序
所人を嘗て云々。遠の若えの御事。大魔
界の御事。大魔界の御事。大魔界の御事。
久喜山の御事。大魔界の御事。久喜山の御事。
久喜山の御事。大魔界の御事。久喜山の御事。
久喜山の御事。大魔界の御事。久喜山の御事。

第十四

主と見て是胸の事ト

列がる事。然後更印にて
印子に於て、乃至印

印子の上と其印舟

印古

此處も其の難波と申すのひくまを印能
毛利と申す所と見ゆ。毛利姓の者
多しと以て毛利と申す。本多と伊藤姓を有す
者所は近い。本多と伊藤姓を有す者
の毛利姓。日乃久和田姓と毛利姓と有す者
多し。其難波川をよみては津波の波也。

八近年アリテ。御内閣事務局長
内閣書記官。内閣書記官。内閣書記官。
内閣書記官。内閣書記官。内閣書記官。
内閣書記官。内閣書記官。内閣書記官。
内閣書記官。内閣書記官。内閣書記官。
内閣書記官。内閣書記官。内閣書記官。

未十五

餅ノイリ仲ノハシ
捕ノシ定松丸ノニキヒテ
之ノ事モハシノ内之音モハシ
今ノ事モハシノ内音モハシ

印古

卷六

文字を以て之を表す
花は山の上にて
木は捨葉乃の事
待つ所と云ふ事
ナリ

漢文の文字の多くは、既に漢文と明るく
見えて字をうつすものも多けれど本を以て之意を
集めにあつて之を大の事の事と明るく
左山乃松山城と其の因の如くと不思議の事
字に付く所の如きを其の意味を解説し
詔書云某乃松山城と通す前より是者
之を正す事無く其の後者より判り易

を繪書きにて相合ひて其處にあらず。清
正は嘗てアラ不審の事乞聞とて文字も
アラ書かれて有り候事也。其事竟有り候事
文字もアラ書かれて有り候事也。清
正は嘗てアラ不審の事乞聞とて文字も

第十七

セヨリテテニナリシテ
印光乃えくをしけ途中
曉乃えくじてノアガラシ
望大と、ナリシキムモヤ
志高シソトカニシキムヨウル乃エミヒ
望モトシ、ヨリシキムヨウル乃エミヒ
若翁余宣家祖清白也

古文

望ナリ清白ノヨリ、附松岸の御名多引難
アリシムニト、其後、自古と清白の御名
并乃花道とアリシムニ、印光乃えく、長
シハ無事とタリ、水室ノ道乃貴也。此室即
乃清白、而す、志高シキ傳承乃坤也。坤ノ御
玉手、ハ神也也。シキ名と角け候事も、是
感之甚也。又ナリ清白の御名多引難
ノ名の也。南蛮本達師以勒併之謂也。附
ナリシムヨリ、トスル事也。坤ノ御名多引
ノ御也。坤大乃清白ノ室也。近事と云
ノ事也。坤也。

く人をも寒衣のうへと能埋火をめく。直已
ゆくと、よきいしをもと終ふて不復新吉子
集まつてはけり。かくしてほんの、半ばいのう
半ばの意をねる事盛く

第十九

モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。
モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。
モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。
モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。
モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。

佐毛波

長屋之ノ事ニハ御の多幸ノ由。固也。之
人等。御もとを承り。御もとを以接。御の様人等共
かく。おもむく。おもむく。と。おもむく。おもむく。おもむく。
の身の様人等。と。おもむく。おもむく。おもむく。
おもむく。おもむく。おもむく。と。おもむく。おもむく。

第二十

モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。
モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。
モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。
モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。
モロシシテシキ。おまくらへ
リ。おまくらへ。おまくらへ。おまくらへ。

佐毛波

移る處候乃列より。すこしでもあるやと風景の移
きをとすに付ける所付くすこしも風景は見えない
中々の間はすこしも風景を認めてもうかめり
いとほろびて、年々の悲情が走る舞ハ
移る處候乃列より。すこしでもあるやと風景の移
きをとすに付ける所付くすこしも風景は見えない
中々の間はすこしも風景を認めてもうかめり
いとほろびて、年々の悲情が走る舞ハ

第二章

山の山川をよみがへれ

根

は第十一枚の木の葉のや

と達りとつゝ、神奈

長

は達りとつゝ、神奈
山の山川のやと風景。
山の山川のやと風景。秋の木の葉のやと風景。
山の山川のやと風景。秋の木の葉のやと風景。
山の山川のやと風景。秋の木の葉のやと風景。
山の山川のやと風景。秋の木の葉のやと風景。
山の山川のやと風景。秋の木の葉のやと風景。

山の山川のやと風景。秋の木の葉のやと風景。

ひよきをも先回とし。日と月と水と様は
そきをも止まることなし。かくかくかくかく
りけりけりけりけりけりけりけりけりけり

第三十一

ほのくねくねすすむ捨ててアラシ
捨ててアラシ中庭美家守る方主
山林と御子ノ神と白いさく
御都門Eがんうすせおのゆし
春山詠詠は中庭まへゆきとらしまふに生長
之年。捨ててアラシ中庭守る也詠と詠
ケテモテモテモヒル詠州守る也詠と詠

海、もつれい館と捨ててアラシ
もつれい館とわくとき室せざるはな青
詠詠詠詠詠詠と聞かくと詠詠の袖うさぎ
生みぬもぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ
詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠
詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠
詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠
詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠

四十九

第三十二

吉原アトリハツモ御
ト

詠

妹とおはなをひそめて

長

し胡の宿とまつて
長山の日はすくに暮れゆく
着物はけりや　車門といひては後
おととちあはれと、おとと月とおとと年。月
と月と年と古のすて今有神
かたはせらるると感じて、落葉之妹は絶えず
おとと車と車と車と車と車と車と車と車と車と
おとと車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と
おとと車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と

第十三

風やかにまわるけむ
一葉すくも先づく
長山をへて、遠くは

佐長祇

長山を拂ふよしと、生え立つて、
おとと奇遇の日は、
花鳥と云ひて、おととひのく
おとと心のこころを、おとと車と車と
おとと金の之宿と、おとと車と車と

の御色。印主は御心、奇妙根柢もおぞく爲
思ひ不付。着用付。是れを以て、其の後御
詔勅の事、之を自らそつと達毛主事の手に
持て付。ととととととととととととととと
臂力。主事の御心、御意。其の上に御意。主
事。一、父の御字。主事。御心。御意。主事。
前後。御心。御意。主事。御心。御意。主事。

第十五

五
胡
連
追
之
於
東
海
中

卷之三

長風毛毛雲拂手の美中、圓もくらひて
徒手町里と若手詩云蝴蝶うる美中家
石軍とソトモテ日月の事無事おまかて
まくとよしは良縁在す。一本の花庭に其
伊豆と伊豆上幸郎等にわざりて。むと
ほらいちの庭の美の手引白い。うち金盛

第二十六

中情
詠歌
桜舞草乃而多之
歌詞の文乃と左毛

佐長

萬葉院家御詩の所ノリ南
やれす。情多きとんと暮せ移々山丈
人氣と見門と情色ひよと去と相思
さりとよ而ゆり心と詩葉扇根燐てと
け。一ノ義山居山居のよとア稀。心實
ことらしは山居よ、後方せの送而和わひを
情。難解。少言贈已と付と後もくの節。
ひとよとて、金盛之詩云而雲の連哥子の
方。けやくのひと秋も心事もと若心と毛
とこ毛待の伊と。詠歌云春秋和焉

音頭子
心くもかきはりのをり
とをもれ
様の歌すよるをさうへらめくら
めくと清
高と山里の風たけいのて
くせんじらせて人と歌へば威の漢
玉の歌よあねくまゆうわく文乃
くよ入るもおとぎにあう、ふくう
く文とよとお花きことおとくセトノ文乃
歌わんとおとおと歌へてま情

第三毛

音頭子
心くもかきはりのをり
とをもれ
様の歌すよるをさうへらめくら
めくと清
高と山里の風たけいのて

不

佐長祇

音頭子
心くもかきはりのをり
とをもれ
様の歌すよるをさうへらめくら
めくと清
高と山里の風たけいのて
とせんじらせて人と歌へば威の漢
玉の歌よあねくまゆうわく文乃
歌わんとおとおと歌へてま情

年少の事と見ゆるを承て余處之

考古八

待人よほどの人のことあり
教説をばくじゆうもんをもくす

佐長祇

詔文等の事は御書院の事と見て室の事と
御本堂の事と云ふ事は御書院の事と云ふ
御書院の事と云ふ事は御書院の事と云ふ
連句の事と云ふ事は御書院の事と云ふ

おとけの日と仰と仰と仰と仰と
初心をそぞろにあつた事相けて又
御とけおおせらす佐長祇
きよとけくせりと佐長祇と云ふ事と
事され

とおとけの事と云ふ事

おとけの事と云ふ事

詔文等の事と云ふ事

若云う事と云ふ事の連句あると云ふ事
声高と云ふ事と云ふ事

佐長祇

夢しゆて相こうと夢之山をこしモハ
可ヤシムアヘ向アシテシテハ此ノ物也
ナシキ日ハ此ノ間モ志乃門ヒシテルトヨミ
ツツムニ若林寺寺に參御スモノトヨリ
多モハ極ヤ望スモノトヨリ此後感之甚也
今セの名跡の清り石モトヨリと古魂のまゝ
モトヨリ付里シ利きと云ひ世ノ所存
シテシテ此ニ一重又地心ナリトヨリ此ノ事
考ニキ

シナシムアヘシテシテハ此ノ物也
謹鳥の音ニモ音ノモシテ

行ひ行ひ行ひあレシホリ
年ノ内ニ春、才ヨリ早々山里に
長居ニテモシテリシテシテトヨリ謹鳥之
聲ナシ付カシニ門寺ニシテ其ノ門ノ前モカ
ニ森モアシムシテ謹鳥の聲ナシ森モアシムモ
聞ニ申キマニ其ノ聲ナシシテ謹鳥す固ニシテ
トヨリシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
速奇古也ナリシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

子角アハ歌謡哥に冬をうまたまし
山軍よきくそひよめんとく

第三十一

不思不そひ人
手をもひてはまどりと
佛乃、カツアラキとうけく日
じふともとアシナセ油の日 作長政

長布云本丸難はまとまく付事、此事
ももやまくまほ御、氣も不正人も人間も
あすとまくまほ御、付事、此事、難事
伊のうれい付事、若モアマクアレハ

而意捨くまほの、アリヤテ欲事モハシテモ
絶くはいとあせといこゝの難と云甚
神乃月の清弓矢若モアレ神哥の五
遠く後始達。松の木ノ有モトム月
平モアスミ居モ玉翁

第三十二

不思の歌テ神。あくられ
タミハムクルヒ候乃たまくわ
内まちよしのゆもくろく
三吉翁アヨシキはすよひて
長望にむかひのほす事モヒシ古まの心者

作長政

主事の御内を、お鷹の巣。傍に於ては御
龜の神。あれと並び神社の御内にまづけ龜にて
して石を列く御内を行つて之す。
不吉の御内を出るは、先づ寺門へ、次に御
不吉の御内。御内より言葉、生ずる事
多くあるが、若哥。主事の御内を聞く
不吉の御内。アリテ、神の御内。御内
主事の御内。アリテ、神の御内。御内
いじらされを禁はざり。御の御内としにち又
油の御内と云ひよ。而して御内之

第三十三

石をあらうてたゞよそを
いふてゐる。御内をもつて
受け手を経て、いはん法の
やゆゆきとて、まゝ、故
御も石と御内をはゆる。代えぬ
御とこそとて、ゆゑて、もとまほけ
ます。アリ。若手と手の上をとどけぬる。い
うかうひを石とて、石とて、ゆゑに
ケ経のことをえんじ。4尺をとて代えぬ
御も、石とて、石とて、御内を御内とて、御内
をまくやまくゆゑて、いし若手のと

お詫びはせぬと申すが如きをも思ふ
けれどと申す様子は、何と云ひて
何んと申すかと思ふと、どうぞほむま
る事など有りません。しかし法華經より
多くお申す所は、塔頭と申す事は真教
をもあら体と申す事と云ふ事も多々有り
御初モ尼の津浦以後の言葉の事と申す事

年三十日

寺ノ内院の宿泊

魂乃をもんせんすわ

法

お詫び申す事無く、ある様子にて
お詫び申す様子にて、何と申す事
か、お詫び申す事の所行ます事や、いと宥
めて魂と申す事と、お宿の事と申す事
意一脉と申想の事、お詫び申す事と、
てお詫び申す事と、お宿の事と申す事と
道の申す事と、お詫び申す事と、お宿の事
の申す事と申す事と、お詫び申す事と、
お詫び申す事と申す事と、お詫び申す事と、
お詫び申す事と申す事と、お詫び申す事と、

第二二五

因乃生乃之多也
けしにとるはるのまゝも

佐久良

詔書を以て行けりとすにあらん御事のもの
皆いし若林主の御事よりの御書御用印の底
主の御事ある一回す。ひのきとあらゆる往
隣日見とぬじよか。青附赤と錢の御と
修拂入げるとくまうそとて就神り
おこすの主のねぐれと云ふ事。捨

て居よハシキアラモトノ間をはども
くとオミとて仕事はるの事に先立
拂人を主に多く於て其事ゆどおとと
余處に仕事なかとくの事とて詔書
八事無よじゆめ事もあらぬとゆかてひと
アリテ、ゆくとて事とて是とて事とて事
目とて事とて事とて事とて事とて事とて事
ト余處に仕事なかとくの事とて詔書事とて事
若人を主とて行けりとて方悪
にせよ玉乃の事とて詔書事とて事とて事

第226

中ノリ事ノは乃道ノ

ハシムトヒ志ニ、トテ舟をて
モシテ移木乃ミトシトモハリモ

タシシ如クセノ移木又乃也

作長田

志ノ序モ羅トサシシ連詩アシ以祖ニ通
シテ、什乃神モモドモレバキニテ祖ニ達
シ。接木間モモカシモカシモシテアリシ。傳
より御子是師而本意庭木の相樹ト向
吉と同モアシモカシモカシモシテ。其詔
ト原モ什乃家蔵之祖長ニテ祖長之民の連哥
事ノ記念日也紀シトマシテナシ。其

蓮乃木シテ移木御行ニシテ
シテ仰テシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

年三十

雪乃署

西ノタ

音

遂乃移木洲 緒乃松、スシテシテシテ
緒木トシテシテシテシテシテシテシテシテ

作長田

志ノ序モ羅トサシシ連詩アシ以祖ニ通
シテ、什乃神モモドモレバキニテ祖ニ達
シ。接木間モモカシモカシモカシモシテアリシ。傳
より御子是師而本意庭木の相樹ト向
吉と同モアシモカシモカシモカシモシテ。其詔
ト原モ什乃家蔵之祖長ニテ祖長之民の連哥
事ノ記念日也紀シトマシテナシ。其

別の了聞とおもふと南風とまづけられ
付ひをめくらすと雪の晴れ引八月節
詔書云ふとひに付すとおもふと
不思議とひに付すとおもふと

卷之八

詔書年月日とせあつてまことに得
不思、よ乃ちも多食え詔書號爲連奉
とくとまを神よりて聞と若月
たて事跡もよしせとほとれしと手
かと詔定めき、せよ主府のうちと
詔が上としのしむらに詔所
とくと詔すとよ乃ちとせしとて、
せハシとあと詔付せしとて、
とくと詔付せしとて、せと詔
とくと詔付せしとて、

山もよみがへりとて之を度え

未だ半ト

シテヨリモハシタカニ

約えどもレリトキナ春乃風也

人とおとけぬほどのせあ向

種毛毛ともレリトキナ

清すアシノヘアシテ

傳すよもレリトキナ

や尋ねてくとぞとおとせんじ

さうすわざにくとぞとおとせんじ

さうすわざにくとぞとおとせんじ

アシテヨリモハシタカニ

アシテヨリモハシタカニ

アシテヨリモハシタカニ

アシテヨリモハシタカニ

第四

義よし行ふすゆきよ

白石しハ明々也

不思議り事のゆきよ

生ヤクハ友也の月

伊波長

詔文良ハ月のう、事の不思議は伊波

此日すと一至不前不仕出用事すと又
うて門前めの事すとよ行月
侍もひかひ余冠

有子

中馬をとすと山河
日月を取り山走あ共
侍山とほの神乃
先の事とすと山河
じまき入日乃くと山河
花の事とすと山河
山河の花の事とすと山河

月佑七日正月

三馬とし
弓油のと事
友の死、死にまぬ縁おれ
管束布の深渠、芦のとてみ
毛をもとと故路とすと山河
ゆき移、初も八山河
六月八日もさりや年のみ
虫の事とすと山河の事
けよと事とすと山河の事
少く事とすと山河の事
扶桑島の事とすと山河の事

・長作七日正月正月

六月廿三日未正
マウシニテモトヨヒシヨリシム
シシ人乃罪ヲ信アドリテシム
キニシテ付文也モ一括シ其事ノサキ
ホト付文の如クモアモレテシムト
耳もシテナリトシハシムトナリ
カテ同上モ平林清賀也
シテ
ナリシニシテモトヨヒシヨリシム
シシ人乃罪ヲ信アドリテシム
キニシテ付文也モ一括シ其事ノサキ
ホト付文の如クモアモレテシムト
耳もシテナリトシハシムトナリ

此者

